

2024年1月28日

説教題「彼女の新しい物語」ヨハネ福音書4章16～30節

主任牧師 加藤 誠

**「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝するときが来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからである」(ヨハネによる福音書4章23節)**

サマリアのシカルの村の井戸端に一人座っている主イエスが「水を飲ませてください」と頼むところから今朝の話は始まります。今から60年ほど前、神学生だった時に四国に伝道旅行に行った牧師の話を聞いたことがあります。「水を飲ませてください」と見知らぬ人の家を訪ねて頭を下げることで旅を続けることができた。また10年ほど前にルワンダに出かけた時の光景を思い出します。人々の一日の暮らしは朝の水汲みと水運びから始まります。それは女性と子どもの仕事でした。水は命そのもの。生きることと水を汲むことを切り離すことはできないのです。今朝の聖書で主イエス「水を飲まなくても平気！」という超人ではなく、旅に疲れ、喉が渇いて「水を飲ませてください」と頼む。私たちと同じ命を生きる主イエスの姿から話は始まります。

当時は男中心社会の古代ユダヤであり、「犬猿の仲」のユダヤ人の男とサマリアの女との会話です。そこには明確な上下関係と差別感情があったので、「おい女、水をよこせ！」で済むところを、主イエスは「水を飲ませてください」と頼みます。社会が強いる上下関係や差別感情から自由に、人と人との平らな関係を生きられた主イエス。それがこの女性には大きな驚きでした。「いったい、この人はどういう人なのだろう?」。その驚きから、二人の間で不思議な対話が展開していきます。

主イエスが言います。「水を飲ませてくださいと頼んだわたしが誰かを知っていれば、あなたの方から生きた水を飲ませてくださいと言うだろう」と。先ほどの「平らかな対等な関係」とは全く異なる「上からの言葉」です。女性はきちんと来たのでしょう。「あなたは私たちの父祖ヤコブよりも偉いのですか。この井戸はヤコブが私たちに与えてくれた恵みの井戸です。その水よりも尊い水があるのですか?」と。サマリアの人たちが大切にしていた「物語」の価値観に生きている女性がここに見えます。

ところが主イエスは、さらに「上から」語りかけるのです。「この水は飲んでもまた渇く。けれども、わたしが与える水を飲む者は渇くことがない。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」と。ここに来て主イエスが語られているのは、私たちが毎日飲む「水」のことではなく、神から注がれる「霊」のことを「水」にたとえて語っていることに気づかされます。肉体を持つ私たちが毎日「水」を必要とするように、神から注がれる「霊」の水が私たちには必要だ。私たちは肉体を潤す「水」だけではなく、創り主であり愛なる神から注がれる「霊」の力、「霊的なつながり」なしには生きることができないからです。

ヨハネ福音書の主イエスはこの場面のように「上からの言葉を語る」ことが多いのですが、しかしこの主イエスによって、私たちの心に天の窓が開けられ、天の光が差し込み、恵みの雨が注がれる体験をしていきます。まさに「人はパンだけでなく、神の口から出るひとつひとつの言葉で生きる」のです。

シカルの女性が「その水をください！」と頼むと、主イエスはそれまでの会話とはまったく関係のないことを語りだします。「あなたの夫を連れてきなさい」と。なぜなら、それはこの女性がずっと苦しめてきた心の重荷にかかわることだったからです。そして女性は主イエスとの会話を通して、主イエスが自分の過去のすべてをご存知でありながら、彼女のことを人として対等に見て、大切な課題をきちんと話してくれる方であることを知るのでした。主イエスの言葉は「上から」ですが、決して彼女を見下ろしてバカにしているわけではない。五人の男と結婚しては離婚を繰り返してきた。そのことで彼女のことをどうこう言わない。彼女のこれまでを受け止め、彼女の人格を尊重しながら、その彼女に「神の愛につながって、礼拝者として生きていきなさい」という祈りをもって主イエスは向かい合われるのです。

旧約聖書の「律法」では、この女性のように五回結婚と離婚を繰り返すと「失格者」の烙印が押されてしまいます。「お前には神を礼拝する資格などない」と。シカルの村でも人々の視線は冷たく厳しいものがあつたことでしょう。それゆえ彼女は村の女性たちが井戸に水を汲みに来る朝の時間を避けなければなりません。

けれども今日、彼女が出会った主イエスは「お前は失格者だ」と上からの蔑みの視線で見下すことなく、「あなたも神の礼拝者として招かれている」と教えてくれたのでした。サマリア人とユダヤ人は、ゲリジム山の神殿とエルサレム神殿の正統性を巡って激しく対立し、非難と憎悪をぶつけあってきました。けれども神は「どの神殿でささげる礼拝が正しい」などという方ではない。ユダヤ人であろうがサマリア人であろうが、誰もがどこでも「霊とまことをもって礼拝すること」を求めておられる。あなたも自分に注がれている神の愛を知り、日々神の霊と力を求めて生きるなら、礼拝者として生きることができる…と主イエスは教えてくださったのでした。

シカルの女性は「律法」の要求のもとで、さらに男性中心の価値観のもとで、彼女の過去を裁かれ、人々の冷たい視線にさらされて、毎日心に思い枷を強いられてきたことでしょう。けれども彼女はその自分に注がれている神の愛のまなざしを知ります。人々の一方的なレッテルから自由にされて、神さまを礼拝して生きる「新しい物語」に招き入れられている自分を知らされたのでした。そして主イエスと出会った彼女は、シカルの村の人びとに主イエスのことを語り伝え始めます。それは、それまでユダヤとサマリアとの間にあつた分厚い差別と偏見の壁を打ち壊して、一人ひとりが自由に愛の神さまと出会って生きていく希望の物語の始まりとなつたのです。